

# 仕事と私事は、あざなえる縄の如し



## 和田玲子

旭化成(株)研究・開発本部イノベーション戦略  
総部人財開発部  
[100-0006] 東京都千代田区有楽町 1-1-2 日比谷  
三井タワー  
部長  
専門は光有機化学, 知的財産.

<https://www.asahi-kasei.com/jp/>

2002年秋、私は私事で仕事を辞めようと思った。その年の初めに生まれた長男は先天性の脳の障害で予後不良、と医師は言う。今後、立つことも座ることも、話すことも食べることもできず、てんかんの発作が絶えず、24時間の医療的ケアが必要になるという。感染症に弱く、3歳までに半分の子が、その次の3年間にはそのまた半分の子が亡くなるらしい。そして6歳まで生き延びたとしても、支援学校に通うには親の付き添いが必要だという。今は育休を取っているものの、こんな見通しでは復帰の道は見えない。モノづくりがしたいと新卒で入社した旭化成だが、辞めざるを得ないだろう。そう思って、上司に事情を話した。話を聞いた上司はこう言った。「和田さん、今は、3歳になる年度末まで育休を取ることができる。育休後、復職できるかどうかは、確かにわからない。でも、今辞めることはない。3年後のために、選択肢は残しておいてはどうか」

その後、長男を少しでも健常児に近づけようと、病院を回ったり、リハビリに励んだりしたが、長男の機能はどんどん低下し、私が頑張れば頑張るほど、長男は苦しむ事態に陥った。そして社会からも取り残されたと感じた。私事ですっかり行き詰まってしまったのだ。

そして3年後、私は復職した。夫と一緒に、医療的ケア児を預かってくれる保育園の近くに引越し、ヘルパーさんを頼み、両親の支援を得て。当時、行政からも「前例がない」と言われた重度障害児の母の復職である。朝は夫に送りを任せて、早朝に出勤、フルタイムで勤務し、夕方早めに帰宅。帰宅してからは1分1秒の戦いで、家事とケアが終わると布団に倒れこむ毎日だった。そんな日々だったが、驚くべきことに、私事の行き詰まり感が、仕事によってほぐれていった。長男に過度な期待をかけることはなくなり、「預けてまで働くのだから意味のある仕事をしよう」と自然と仕事に熱が入り、上司や同僚の理解も厚くなり、うまく回り始めたのである。もちろん、仕事が思うようにいかないときもある。そんなときは、私事で、長男を支えてくれているお友達や先生、新しく重度障害児のために制度を作ってくれた行政にも感謝し、「仕事ができていてだけで上等」と思えるようになった。そして、苦勞し

つつも周りの支援に支えられて、係長、課長、部長と着実にキャリアを重ねてこられた。

とくに女性にとっては、「仕事」と「私事」の間で選択を迫られる場合も多いと思う。しかし、どちらか一方を選べば楽になる、というのは幻想かもしれない。実際には、一輪車よりも二輪車の方が安定するように、一本の紐よりも二本の紐をあざなった縄の方が丈夫なように、「仕事」と「私事」の双方を取る方が、お互いがお互いを助けてくれて、人生自体は安定し、丈夫になるのではないかと私は考えている。そして、女性だから、という社会的なプレッシャーで選択を迫られるように感じたときには、上司が教えてくれたように、自ら選択肢を減らさないことも重要だと思う。

いつ長男が体調を崩すかがわからなかったため、信頼関係ができた仕事上の相手には、理解を得るために私事の話も少しだけ伝えた。すると「実は……」と、ご自分やご家族の苦勞を語ってくれる方が意外と大勢いて驚いた。ともすれば、自分以外の人は皆、苦勞なく過ごしていると思いがちだが、人それぞれ苦勞や葛藤を抱えて生きているのだ。そして、お互いに共感と理解をもって、仕事を進めることができた。この仕事に私事をもち込んだ経験から、自分の悩みや経験について、少し勇気をもって話をしてみることに価値があると思うようになった。

長男は、幾度となく死地を乗り越え、6歳どころか、17歳まで生きた。生きるということを毎日教えてくれた。医師が言ったとおり、最期まで寝たきりで何もできなかったが、何も言わずとも、周囲の人が自然と長男のために動いてくれて、素敵な環境を自ら作り出していた。長男と一緒に過ごした日々は、人間は互いにケアしあって生きやすいコミュニティーを作ることができるのだという、人間の本来の優しさを信じることができた日々だった。

仕事と私事があざなえる縄のように一体不可分となって四半世紀を生きてきて思うことは、人類というのは先天的に多様性があり、助け合えるからこそ、存続できる、ということです。なので、悩みを抱えたときは一人で抱え込まずに誰かに話をして、受けた人は助けましょう！